

【CIEC 第 105 回研究会報告】

テーマ：越境する学び -不確実・不安定な状況に対応できる学び-

日時：2015年1月5日(月) 13:00-16:30

会場：大阪工業大学 うめきたナレッジセンター（グランフロント大阪 ナレッジキャピタルタワーC9階）

共催：教育システム情報学会関西支部，日本情報科教育学会 近畿・北陸支部，NPO 学習開発研究所

参加者：30名（高校生，大学生，大学院生，小中高教員，大学教員，教育系NPO法人関係者等）

司会：辰島裕美(金沢星稜大学女子短期大学部)

進行：大木誠一(元神戸国際大学附属高等学校)

運営：CIEC 小中高部会



■開催趣旨

CIEC 小中高部会は，今，ICT をどのように利用するかだけでなく，教室の「学び」そのものに焦点を当てようとしている。そこで，本研究会では，高大接続で求められる学びとは何かを探るため，大学の情報教育と中学・高校の事例を取り上げる。昨年開催した 2014PCC セミナー1 では，現役の高校生が，パネル発表やこれからの情報教育についての提言を行った。高校生の発表や意見に直接接することは，多様な視点から「学び」について議論することの大切さを再認識させるものであった。

本研究会は，小学校・中学校・高等学校・専門学校・大学等すべての教育機関における新しい「学び」を，できるだけ多様な視点から議論できる場となることを目指して開催する。学校で当然のことと思われ，決まりきった日常活動になっている「学び」に，変化をもたらすための機会として「越境する学び」をテーマとし，ワークショップ形式で開催する。ここでは，中学生・高校生・大学生を含み，教員，教育関係者，教育に関心のある社会人までの幅広い参加者が，立場の違いを越えて対等に議論することを想定している。ICT を活用すれば「学び」が自動的に促進され，タブレットなどを導入するだけで子ども達の「学ぶ意欲」は向上すると報道される傾向もある。しかし，導入しただけでは教育効果が上がらず，ICT 活用教育が否定されることさえ起こっている。ICT の活用と何が組み合わせられれば，「学び」がうまく展開されるのだろうか。従来，日常生活でスマートフォンをよく使う生徒・学生とともに，教え手・伝え手が ICT を活用した「学び」について検討する機会はほとんど無かった。ICT は多様化する学びをサポートするツールだ。しかしながら，考えることを自分で学び，あるいは，学び直すために正しく問題を提起するためには，自分の言葉で語る必要がある。

「学び」について，人としてのすべての違いを越えてお互いが対等の立場で協働し議論したい。

■プログラム

13:00-13:05 開会の挨拶

13:05-13:13 開催趣旨説明

13:13-14:15 グループワーク 1

「ICT を活用した学びで伸ばすことができる力は何か？」
グループごとに討論 (約 60 分)

14:35-15:35 グループワーク 2

ワールドカフェ [他グループの意見を確認] (10 分)
「これからの学びに必要なものは何か」グループ討論してまとめる
(50 分)

15:35-16:20 共有と意見交換



グループごとにまとめたものを発表し、全体で意見交換
16:20-16:30 閉会の挨拶 (アンケート記入)

■開会の挨拶

中西通雄氏(大阪工業大学情報科学部コンピュータ科学科)より、本研究会の会場である大阪工業大学うめきたナレッジセンターに関する紹介があった。普段は大阪工業大学の知的財産専門職大学院(社会人向け大学院)で利用しているとのこと。



■開催趣旨・背景・課題説明

進行の大木誠一氏(元神戸国際大学附属高等学校)より、資料に基づき本研究会開催の背景と、テーマ、流れ、課題等が説明された。背景では、高大接続、主体的に学び考える力の育成、大学入試改革、高校の授業の質保証、アクティブラーニングなどについて触れられた。

ワークショップのテーマは、「主体的に学び考える力を身に付けることを目的とした『学びの環境』をデザインする」である。

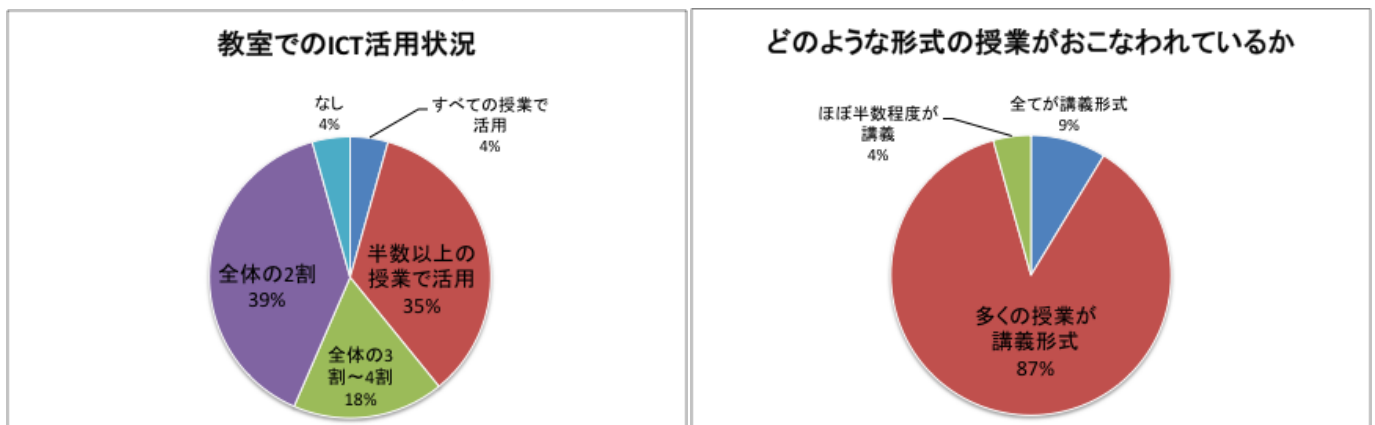


■グループワーク

まず、ワークシートに基づき現状の問題点把握を行った。本研究会参加者の状況は下図の通りである。その後、研究会資料に基づき、学び手主体、評価主体、知識主体、コミュニティ主体という4つの視点について説明が行われた。

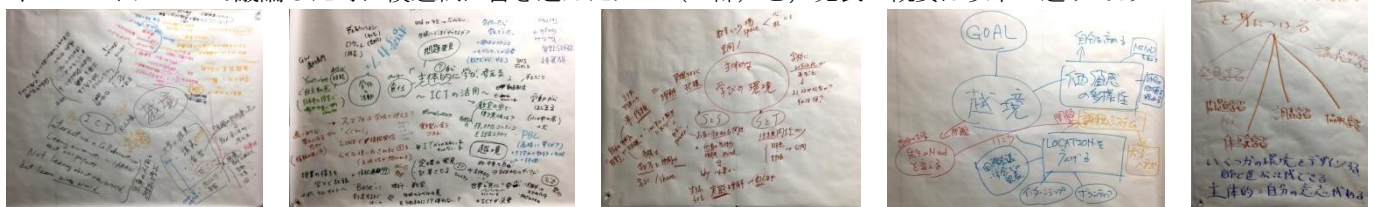
各グループで「特色のある授業の紹介」や「教室の学びにICTは必然か」という観点で意見の交換、共有後、現状と問題点について話し合い、その後「主体的に学び考える環境をつくるにはどうしたらいいか、どんな環境が主体的に学び考える環境なのか」について話し合った。

話し合った内容を模造紙にまとめた後、ワールドカフェ形式で6つのグループ間の情報共有や情報交換を行った。



■グループ発表

グループごとに模造紙を提示しながら話し合った内容を発表した。中には紙芝居形式のものもあった。グループワークやワールドカフェで議論した時に模造紙に書き込んだメモ(一部)と、発表の概要は以下の通りである



る。

- 1) 「主体的に」という部分を、Reflection を通して実現して行くことができる。「現代社会」の授業で好きなものや興味のある事柄を調べて発表する体験から、様々な気付きや学びを得た高校生の体験から、最初は強制であっても教師からテーマや切っ掛けを与えることが大切であり、学習活動の後で、良い Reflection を促すことが出来る教師や外部人材の存在が必要。
- 2) 主体的な学びの環境の条件は、教師と生徒との信頼関係があること。目標と評価の仕方を公開することが前提。また、生徒同士でお互いに学び合える、高め合える関係性を作ることが重要。個人主義に陥っている生徒達の実態を理解し、生徒達同士が互いに理解し合うことが大事であるという明確なねらいを持って指導しなければその関係は築けない。互いを理解し合う、多様な学び方を仲間達から学びシェアする。生徒達を信頼することで、管理ではなく色々なスペースを与えることが出来るようになる。英語の試験へ向けての取り組みで、英単語を理解するためのムービーを作らせてクラスの LINE で共有させた所、学力向上に結びついたという実践事例から、互いの学び合いが推進する環境を教師が提示することが大切。
- 3) 「越境する学び」が研究会のテーマであるので、越境とは何か、その問題点やメリットを掘り下げた。越境する中で価値観の多様性を理解すべき。ロケーションを広げることも重要。一番の問題は評価システムではないか。高校で越境した学びを体験しても、大学入試では評価されない現状が問題では高校教員のマインドセットを変えることは難しい。主体的な学びを推進するには評価システムを変えることが必要。
- 4) 「気づけば学んでいた場」を最終目標として考えた。この場に必要な3つの要素は、①社会とのつながりを知る（学生自身が気付くことが望ましい）②とつきやすい（スマホ、タブレットを使うなど ICT を活用）③自分の興味に関係することである。最終的には「次につながる学び」になることが最も重要。学生自身が次の一歩へ踏み出すことへの動機付けになる。
- 5) 主体的に考える力を身につけるために、高校において講義型学習（自分で考えながらノートを取って主体的に関わることができる）、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、協働学習など様々な学習環境をデザインし、それらの学びを生徒が経験することで、自分が主体的に学びやすい学習スタイルを選択できるようにして大学や社会へ出て行くことが必要。自分の意志があるということが主体的ということであると考える。
- 6) 学習者が主体的に学んで行くためには、学習内容が身近であることや学ぶことでメリット（楽しいと感じることでよい）が生じる必要がある。ICT を活用することで、興味関心



を持たせる切っ掛けを与えやすい。また、学校外とも手軽に繋がることできる。ただ、ICT活用ばかりだと飽きも生じるため、ICTを活用しない活動とのメリハリ付けた展開が重要。教師の役割は、互いを否定しない場の雰囲気を作り、協働しやすい教室環境を用意することである。

■アンケート結果から

本研究会終了後にアンケートを実施した所、ほぼ全員から回答が得られた。

- ・いろいろな立場から多様な意見を聞くことが出来て勉強になった。「学び」についてたくさんの考える材料をもらったのでこれからじっくり考えて行きたい。
- ・いつもと違う分野の人と話が出来て良かった。
- ・学びの最大化のために学習環境の整備と言う観点での様々なアイデアを聞くことができてとても参考になった。など、多様な立場の人々と同じテーマで話し合えたことで、新たな視点・考え方を得ることができたという感想が多かった。また、ICT活用の側面では、次のような感想があった。
- ・思ってもみなかったICTの活用方法を知ることができた。
- ・ICTという切り口があったためか、ICT肯定派の方が多いように思う。情報通信技術が使えない場合どうするのかという視点があっても良かった。

その他の感想では、次のような声があった。

- ・ワークショップのみの研究会で全員が参加できたのが良かった。
- ・主体的な学びのデザインの難しさを感じた。
- ・学びについて多角的に考えられただけでなく、今まで自分自身が行ってきた実践についての根本的な問いと振り返りができた。

課題としては、次のような指摘があったため今後の研究会運営の参考にしたい。

- ・討論時間をもう少し長くして欲しい。
- ・初めのテーマがつかみにくかった。
- ・少しテーマが広くなりすぎた感じがするが勉強になった。
- ・評価のあり方についての議論が必要だ。



研究会終了に何人かの参加者から同じような指摘があったが、「これだけの先生、生徒が集まりグループに分かれて話し合っていたのに、自然と同じような問題意識を持ち、夢や希望を持っていることに、勇気と希望をもらった」とのコメントが本研究会の意義を示していた。

本研究会開催にあたり、会場を提供していただいた大阪工業大学と、テーブルファシリテーターとして参加してくれた、法政大学経営学部長岡ゼミ所属の3名の学生に感謝したい。

文責 高瀬敏樹（北海道札幌旭丘高等学校）